

## 巻頭言 平成最後の忘年会での約束

中村佳代子

*Nakamura Kayoko*

(東京農工大学監事, (前)原子力規制委員会原子力規制委員)



平成という元号の終わりが近づくとつれ、平成の出来事を思い出す機会が増えています。日本の12月は職場では忘年会の月、家族のためにはクリスマスの月という思い入れがあります。忘年会の意図はその一年間の苦労を忘れるためにあると、広辞苑は説明しています。

放射線やアイソトープに関係している平成の事象を挙げるとすれば、東京電力福島第一原子力発電所の事故をおいて他にありません。そして、忘年会の意図である“忘れる”ことは決して赦されない事象でもあります。

翻って、昭和の時代には化学工業からもたらされた“公害”という悲劇を、平成の時代には原子力産業からもたらされた“放射線被害”という恨みを生みました。いずれも、科学や技術の発展と栄光の後ろにある陰の部分です。原子力というかつての花形産業はその事故で多くの人の人生を、その意に係わらず、激変させ、その人々の苦労や悲しみを長く引きずることになりました。放射線やアイソトープを扱う科学や技術の信頼が損なわれ、いわれのない中傷やいじめ、差別を生みました。平成の代どころか、次の、いえ、その次の元号の時代にも解決できないかもしれません。放射線を生業としてきた筆者自身も、この事故に対する思いは、無念、後悔、憤り、そして無力感など複雑ですが、この思いを忘れてはいけないこと、そして、後輩にはこの思いをさせたくはないと心に決めています。

原子力規制委員会で立ち上げた“帰還に向けた安全・安心対策に関する検討チーム”での議論の末、平成25年12月、相談員システムの構築を決めました。討論が十分になされていないという批判のなか、12月に方向を定めた理由の一つは『事故で人生が変化した方々、特に、避難生活をされている方々が来年の何らかの具体的計画を立てるきっかけ』にしたかったからです。12月はそれまでの一年間を顧みてその苦労に報いるだけでなく、『来年はああしよう、こうしよう』と、家族で計画を話す月だと、少なくとも筆者は考えていました。チームの事務局はこの無謀な思い入れに応え、徹夜で作業を進め、案を起草し、英文まで作成しました。ICRP等からこのシステムは高い評価を頂きましたが、システムそのものは、残念ながら、うまく運営されているとは言えません。ただ、もし、相談する内容がないのだとしたら、それはそれとして良いことなのかもしれません。人は、不安になって初めてそれまでの安心の時代を思い起こします。相談するような不安がないのであれば少しは安心の時代に戻っているのかもしれません。

安全とは人が決して見ることがないものと、ヘレンケラーが述べています。その見ることがない放射線の安全を分かりやすく説明してこなかったこと、そして、安心させるためとはいえ、放射線の陽の部分だけを話してきたことは放射線のプロフェッショナルとして自戒すべきことでしょう。『安全』でなく、『安心』を保つ“保安”を第一に心がけるべきでした。見ることがない安全について相談を受けることができるぐらい信頼のあるプロフェッショナルになるべく努力し続けることを平成最後の忘年会での約束にしたいと思います。